

～生育のほ場間差大。適切な水管理を！～

7月 日	上旬		中旬		下旬	
	1	5	10	15	20	25 30
生育	最高分げつ期 10 葉期		幼穂形成期 11 葉期		減数分裂期 12 葉期	
水管理	中干し		間断かん水		湛水管理：カドミウム吸収抑制対策 湛水管理は8月下旬まで 低温時は深水管理	
作業	○斑点米カメムシ類対策 畦畔草刈り 草刈禁止期間* ※9月上旬まで。ただし出穂期10日後頃の薬剤散布後7日以内に一度草刈りを実施する。					
	○葉いもちが発生した場合 ブラシ剤又はノンプラス剤を散布 ビーム剤の追加防除 穂いもち防除を実施する場合 コロトップ粒剤5を散布					

1 7月5日現在の生育状況

- 7月5日現在の生育は、草丈は平年比103%とやや長く、茎数は平年比87%となっていますがほ場間差が大きい状況です。また、葉数は平年差+0.3葉とやや多く、葉色は平年比96%と淡くなっています。
- 仙台管区气象台が令和5年7月6日に発表した、東北地方の1

表1 水稻定点調査結果(農業振興普及課)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
本年	51.0	549	10.4	43.4
平年値	49.3	633	10.1	45.1
平年比	103%	87%	+0.3	96%

品種：あきたこまち、管内5カ所平均

か月予報(7月8日～8月7日)によると、向こう1か月の気温は高い見込み、降水量は平年並か多い見込みとなっています。

2 水管理 ～カドミ対策の湛水期間は7/15～8/25が目安～

- 中干しは、遅くとも幼穂形成期前までには終了します。その後はカドミウム吸収抑制対策として、出穂前後各3週間の7月15日頃から8月25日頃まで湛水管理を徹底してください。
- 減数分裂期から穂ばらみ期にかけて障害不稔の危険性がある低温(平均気温20℃以下、最低気温17℃以下)が予想される場合は、幼穂形成期から約10日間、25℃程度の水を10cm位に保つことで冷害防止効果があります。
- 最も低温に弱い時期は、出穂10日前頃の減数分裂期です。低温時は15cm以上(可能であれば17～20cm)の深水管理を実施します。

3 追肥 ～ 幼穂形成期の生育・栄養診断を実施しましょう ～

幼穂形成期の生育による追肥の診断(暫定案)

生育型		生育過剰	理想的な生育	生育不足
草丈 (cm)		65 cm以上	60～65 cm	60 cm以下
葉色 (SPAD502) (葉色板)		42以上 (5.5以上)	39～42 (4.5～5.5)	39以下 (4.5以下)

追肥 (N成分)	幼穂形成期	なし	ムラ直し1 kg/10a	1～2 kg/10a
	減数分裂期	なし	1～2 kg/10a	1～2 kg/10a

注)あきたこまち、目標収量570kg/10a

幼穂形成期(幼穂2mm)の極端な葉色低下は、1穂粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂を確認し、表を参考に生育・栄養診断を実施して下さい。

- 幼穂形成期に草丈65cm以上で葉色が濃い場合は、穂肥は控えます。
- 幼穂形成期に草丈60～65cmで、葉色の低下が見られる場合は、減数分裂期(葉耳間長±0cm、7月25日頃)主体の追肥を実施します。
- 幼穂形成期に草丈60cm以下で、葉色が低下している場合は幼穂形成期(7月15日頃)と減数分裂期(7月25日頃)の追肥を実施します。
- 一発型の肥料を施用した場合は、基本的には追肥は控えるようにします。

4 病虫害防除 ～ 畦畔等の草刈りを徹底して斑点米カメムシを抑制～

★飼料用米も主食用米と同様に防除対策を行ってください★

①いもち病

- 県病虫害防除所によると、BLASTAM(アメダス)の判定では、全県的には6月23～24日に感染好適条件及び準感染好適条件が訪れたと判断されています。管内では、6月29日に感染好適条件が観測されています。ほ場の見回りにより葉いもち病斑を発見したら、直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン、ノンブラス)を散布して下さい。
- 葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤またはゴウケツ粒剤(サンブラス粒剤)を散布するか、出穂直前にビーム剤(またはトライフロアブル)と穂揃期にラブサイド剤(またはトライフロアブル)で茎葉散布を行います。

②斑点米カメムシ

- 畦畔や農道等の草刈りは、出穂10日前までに徹底しイネ科雑草の除去に努めます。
- 水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの残草があると、アカスジカスミカメの侵入を助長するので、水田内の雑草対策を徹底しましょう。

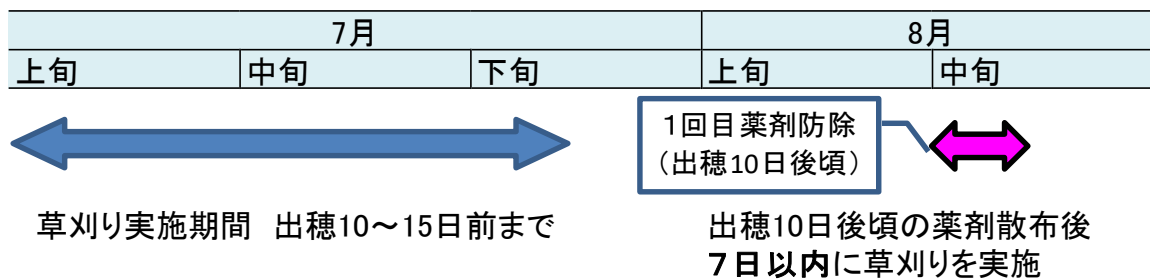


図1 農道・畦畔の草刈り時期